

ZENBUTSU



# 全仏

No.  
539

仏暦2551年 5月  
[2008年]



(得度式に向かう行列を先導する娘たち—ミャンマー 撮影 田村 仁氏)

就任のご挨拶——会長 松長有慶・理事長 豊原大成・事務総長 深澤信善

目次————理事会・評議員会・参与会開催

副会長紹介

論点・視点 ⑯ 富田富士也「こころの危機」

加盟団体をゆく 第15回 融通念佛宗

世界仏教徒会議日本大会概要

理事長答申に対しての各審議会委員長コメント

チベット情勢に関する声明



財団法人 全日本仏教会  
JBF WFB(世界仏教徒連盟)日本センター



おかげさま。  
地域の縁・アジアの縁



## 会長就任にあたって

松長 有慶

半世紀を越す伝統に輝く全日本仏教会の会長職にご推挙いただき、今年四月から就任させていただきました。身の引き締まる思いをいたしております。

思えば昭和二七年に、私は大学を卒業して間もなく開かれた世界仏教徒日本連盟主催の第一回全日本仏教徒会議高野山大会に、ボランティアとして参加させていただき、ご縁をいただきました。

また全日仏の国際部門に関係されている方々の中に、幾人か知己友人がいた関係から、全日仏の幅広い活動状況はよく耳にし、その積極的な姿勢と活発な活動にいつも敬意を払っておりました。

全日本仏教会は、半世紀の歴史の中で、全世界の仏教徒との連帯、英文仏教百科事典の編纂、ルンビニーの復興事業の推進などの対外活動、日本国内では、伝統仏教の諸教団および関係諸団体との密接な連携を図るとともに、一方 社会的、政治的な問題に適切に対応し、日本仏教徒のあり方に有益な指針を数多く提示してこられました。

また本年十一月には、東京において第二十四回世界仏教徒会議日本大会が開催されます。これを機会に、世界の仏教徒とより密接な連携を保ち、世界の平和と人々の精神的な救済のために、仏教の思想と行動の理念を全世界に向けて発信する準備を万全に整えることが緊急の課題であります。

各教団の枠を超え一丸となって、日本仏教の底力を世界に知っていたただくためにも、強力なご支援とご協力を伏してお願いたしたく存じます。



## 力を合わせて

豊原 大成

このたび全日本仏教会第二十八期理事長に御推挽を頂戴し、四月一日より理事長の重任を拝命いたしました豊原でございます。

言うまでもなく、全日本仏教会は、我が国の仏教各宗派のほとんどが加盟されている巨大な機構であり、私如き凡才に充分勤まる役職とは思えません。松長新会長をはじめ、皆様がたの御指導により、何とかお邪魔にならぬよう、精一杯つとめさせていただきます。

それにしても、今日ほど、我が国の仏教が重大な時期を迎え、且つ、真の仏教の活動が、今ほど希求されている時は無かろうと愚考いたします。

現実の問題として、我が国の仏教界は、歴史的な経緯により、実に多種多様の宗派に分かれております。しかし仏教は、もともと、ただお一方、大聖釈尊のお心から流れ出たものであることは申すまでもありません。各宗派がそれぞれ、仏心の広流のために御尽力給わっていると信じては、ありますが、一宗一派の力を以ってしては、なお実践、実現し得ない課題もあることは事実であります。

私たちは今こそ、小を棄て大に抛り、全仏教界が力を合わせて、釈迦牟尼世尊のみ教を仰ぎつつ、仏智に照らされた世の中の実現という共通の目的達成のために邁進いたすべきであります。

浅学非才ではございますが、二年間の任期を大過無く勤めさせていただくべく、皆様方の御鞭撻御良導を衷心よりお願い申し上げます、就任の御挨拶とさせていただきます。



# 事務総長就任にあたって

深澤 信善

全日本仏教会第二十八期事務総長を拝命致しました深澤信善です。所属宗派は曹洞宗です。

二十一世紀は「心の時代」といわれながら、人心はゆがみ、憎悪の連鎖が続き、世界はますます混迷を深め、破壊と報復の不毛なる連鎖は尽きることなく巡り、解決の糸口さえ見えません。

また、国内に目を転ずれば、悪しき資本主義の果てのバブル崩壊と同時に夢さえも失った日本人の緩んでしまった精神のタガは繕いようもなく、国民の倫理観を低減させ、目を覆うような惨状を突きつけています。伝統仏教教団にかかわる私たちは大いなる反省のもとに、今こそ、仏教者として連帯し日本社会へそして世界へ、仏の教えを発信すべきと考えます。

今秋には全日本仏教会五十周年記念事業のまとめともいべき第二十回WWF世界仏教徒会議日本大会が開催されます。これの円成に向けて最大の努力を尽くして参りたく存じております。

関係の皆様のご教示をたまわり任期中、微力ながら全力を尽くす覚悟です。

よろしくご指導、ご支援たまわりますよう伏してお願い申し上げます。

# 第二十八期 副会長略歴紹介



清水谷 孝尚副会長

### 最終学歴

大正大学文学部国文学科卒業

### 職歴

昭和二十一年九月十八日

東京都台東区 善龍院住職

平成八年六月一日

浅草寺貫首就任

同 右

聖観音宗管長就任

### その他経歴・著書等

板東札霊場会会長



中村 文峰副会長

### 最終学歴

二松学舎大学院博士課程

修了

### 職歴

京都市左京区 南禅寺塔頭

慈氏院住職

虎溪山専門道場師家

永保寺住職

臨済宗 南禅寺派管長

### その他経歴・著書等

『禅語百景』『臨済録物語』

『忘れられた(恩)のはなし』他

## 第二十八期 副会長略歴紹介



東條 仁哲副会長

### 最終学歴

早稲田大学文学部卒業

### 職歴

大本山大覚寺庶務部兼公報室長

大本山大覚寺門跡内事長

真言宗犬鳴派管長

大本山犬鳴山七宝瀧寺貫主

### その他経歴・著書等

近畿三十六不動尊霊場会会長就任

泉佐野市介護保険運営協議会

委員就任



若槻 繁隆副会長

### 最終学歴

大正大学中国哲文学科卒業

### 職歴

群馬県伊勢崎市退魔寺住職

真言宗豊山派宗機顧問

全真言宗教誨師連盟会長

群馬県仏教連合会長

### その他経歴・著書等

群馬県仏教保護会理事長

全国更生保護法人連盟常務理事



椿澤 日壽副会長

### 最終学歴

北海道学芸大学卒業

法華宗学林研究科修了

### 職歴

北海道旭川市光妙寺住職

伊東市霊跡別院蓮着寺山主

法華宗陣門流総本山本成寺八十七世貫首

法華宗陣門流管長

### その他経歴・著書等

布教師研究所所長

旭川刑務所教誨師



橋本 明禅副会長

### 最終学歴

高野山大学卒業

### 職歴

世界連邦岡山県宗教者の会会長

岡山県佛教会会長

矢掛町仏教会会長

岡山県文化連盟理事

### その他経歴・著書等

矢掛町文化協会会長



大野 玄妙副会長

### 最終学歴

龍谷大学大学院修士課程修了

### 職歴

聖徳宗管長就任

聖徳宗総本山法隆寺住職



西村 輝成副会長

### 最終学歴

駒澤大学仏教学部仏教科卒業

### 職歴

曹洞宗信松院住職

大本山総持寺国際部長

曹洞宗東京教区長

東京ブレイストクラブ会長就任

### その他経歴・著書等

全日本仏教会国際専門委員

# 第二十八期 役員一覽

## 会長

松長 有慶 高野山真言宗管長

## 副会長

清水谷孝尚 聖観音宗管長

中村 文峰 臨済宗南禅寺派管長

東條 仁哲 真言宗大鳴派管長

椿澤 日壽 法華宗陣門流管長

大野 玄妙 聖徳宗管長

若槻 繁隆 群馬県仏教連合会会長

橋本 明禅 岡山県佛教会会長

西村 輝成 東京ブティストクラブ会長

## 理事長

豊原 大成 浄土真宗本願寺派

## 常務理事

測 英徳 曹洞宗

不二川公勝 浄土真宗本願寺派

石川 正生 真宗大谷派

小林 正道 浄土宗

小松 淨慎 日蓮宗

服部 融宣 高野山真言宗

細川 景一 臨済宗妙心寺派

濱中 光礼 天台宗

岡部 快圓 真言宗智山派

浅井 侃雄 真言宗豊山派

## 理事

森田 俊朗 和宗

岡野 正純 孝道教団

桶屋 良祐 念法眞教

立部 祐道 真言宗御室派

山下 一眞 西山浄土宗

本間 孝康 東京都仏教連合会

桑原 大宗 神奈川県仏教会

加納 博司 新潟県仏教会

伊藤 文元 岐阜県仏教会

増田 貞圓 静岡県仏教会

服部 文昭 大阪府仏教会

松濤 弘道 徳島県仏教会

安原 晃 学識経験者

## 監事

林 晋堂 学識経験者

萩野 映明 学識経験者

近藤 真道 愛知県仏教会

## 評議員

乙川 暎元 曹洞宗

桑羽 隆慈 浄土真宗本願寺派

関崎 幸孝 真宗大谷派

田中 信道 浄土宗

伊東 隆司 日蓮宗

岡部 兼海 高野山真言宗

松山 英照 臨済宗妙心寺派

谷 晃昭 天台宗

上杉 照延 真言宗智山派

菅野 秀浩 真言宗豊山派

武田 圓龍 天台眞盛宗

座間 光覚 天台寺門宗

守山 雄順 聖観音宗

谷口 真祐 妙見宗

壁瀬 宥雅 真言宗醍醐派

吉井 惠貫 真言宗須磨寺派

岡田 康秀 真言三寶宗

東條 仁靖 真言宗大鳴派

杉浦 秀祐 浄土宗西山深草派

長岡 正明 真宗高田派

安田 義樹 真宗木辺派

高木 貞歡 時宗

松浦 浩道 臨済宗南禅寺派

佐分 宗順 臨済宗相国寺派

青木 謙整 臨済宗東福寺派

原井 慈鳳 法華宗本門流

佐古 弘文 法華宗陣門流

藤崎 広学 顕本法華宗

村上 太胤 法相宗

古谷 正覚 聖徳宗

佐伯 龍幸 真言律宗

藤井 純恵 北海道仏教会連盟

大井 亮 青森県仏教会

小保方教円 栃木県仏教会

青柳 雅明 山梨県仏教会

矢坂 誠徳 兵庫県仏教会

家森 宏善 鳥取県仏教連合会

玉久 圭澄 香川県仏教会

小角 隆幸 高知県仏教会

一月 正人 長崎県仏教連合会

吉田 海心 宮崎県仏教連合会

善國 乘憲 沖縄県仏教会

島田 喜久 全日本仏教婦人連盟

五條 良知 全日本仏教青年会

参与 田中 利典 金峰山修験本宗

黒髪 寛延 真言宗大覚寺派

石堂 恵眼 真言宗中山寺派

鬼頭 誠英 浄土宗西山禅林寺派

大谷 義博 真宗仏光寺派

中江 慈光 融通念佛宗

今杉 康道 臨済宗円覚寺派

高井 正俊 臨済宗建長寺派

竹内 正道 法華宗真門流

加藤 乘安 本門佛立宗

筒井 寛昭 華嚴宗

中村 昌道 福島県仏教会

都筑 玄澄 群馬県仏教連合会

山口 祐哉 長野県仏教会

高岸 義昭 滋賀県仏教会

長澤 香静 京都仏教会

川島 謙宗 京都府仏教連合会

山田 本然 岡山県佛教会

津村 泰雅 愛媛県仏教会

高山 久照 日本仏教保育協会

逸見 道郎 国際仏教興隆協会

安孫子虔悦 仏教情報センタ―

## 論点・視点

16

## こころの危機

## 甘えられない中高年の「こころの危機」

## —カウンスリングの現場から—

子ども家庭教育フォーラム代表 富田 富士也

「こころの危機」を相談という臨  
床現場から問いかけたときふつと思  
うことがある。

「こころ」とはどこにあるのらう  
か。

それは人と人との関係の中にある  
のではないだろうか。つながりとい  
うことである。高齢者の中には胸に  
手をあてて「気持ち」と言う人がい  
る。若者に尋ねると「脳」といつて  
頭を両手で抱え込む人もいる。たし  
かにどちらも正しいが二つの働きが  
対になって「こころ」が存在してい  
ると私には思える。「こころここに  
あらず」「上の空」「以心伝心」とい  
う言葉が相談場面ではとくに子ども  
から父親に向けられることが多い  
が、それは「お父さんは子どもの話  
を聞いていない」という訴えであ

る。関わりの希薄さ、無頓着さを嘆  
いているのである。私は「心田を耕  
す」という言葉を小中高校生対象の  
講演などで好んで紹介するが、「関  
わらないと心は耕されないよね」と  
言っつてわずかな時間、隣の人とお喋  
りをしてもらっている。すると一分  
間位で強張っていた顔にはほほ笑み  
がこぼれる。そしてたたみかけるよ  
うに「ほら、話しくかった人とも  
話せたりすると心が変わっていくよ  
ね。嫌いだった友だちが好きになっ  
たり、好きだった友だちの別な面を  
知ったりして、人とは人間関係とは  
変化していくんだよ。これを、諸行  
無常、って言うんだね」と問いかけ  
る。いじめによる自殺予防をテーマ  
にした講演ではここで決まり文句を  
言う。「関係は変化するんだから、

自殺しちゃ、損だよ」と。

その「こころ」の「危機」とはど  
のような状態をいうのであろうか。  
日常的に語るならば「孤独」という  
ことではないだろうか。つまり「関  
係性の喪失状態」を「こころの危  
機」と私は相談現場からイメージ、  
実感している。そこであらためて子  
どもたちに尋ねてみたりする。「す  
べての人が誕生とともにかかえる避  
けられない苦しみはなんですか。そ  
う不安、孤独だね。人は孤独です。  
だからつながるのです。寂しかった  
ら『寂しい』と隣の人に言うんだ  
よ。甘えていいんだよ。いつまでも  
すねて、いじけてつながりを待つて  
いたら孤独から抜け出せなくなりま  
す。これが国語辞典にも載っている  
『縁なき衆生は度し難し』です」縁  
がなくなり、人間関係であることを  
知ったとき、子どもたちは「縁を起  
こす」勇気を学んでくれる。そして  
「こころの危機」からの「脱出」は  
縁起と無常を心の支えに（マイン  
ド）、身近な人たちと生身の関わり  
を続けていくことだと思えてくるの  
である。

しかし子どもたちの身近な存在で

ある親やまわりの大人はこの「こ  
ころの危機」とどのように向き合っ  
ているのだろうか。「子どもは親の背  
を見て育つ」といわれるが、「背」  
とは人間関係である。だからこのこ  
とわざは「子どもは親の人間関係を  
見て育つ」となる。その子どもたち  
の人間関係のモデルとなる親の中  
年層がかかえる現代的テーマの一  
つが自殺である。

「どんなに苦しくてもわが子を残し  
ては死ぬに死にきれぬ」と生きるこ  
とを選びぬいていった親の心情は過  
去のことなのか、バブル後、子育て  
渦中の特に父親たちが自ら命を絶つ  
という相談に出会うことがある。そ  
れもわが子との確執に苦悩してのこ  
とではなく、父親自身がかかえてい  
る「こころの危機」である。

先日小・中・高の三人の子を残し  
て夫（四十五歳）に先立たれた妻が  
死後二十日位たって私の相談室を訪  
れた。

「自殺した夫のことでの喪失感私  
にはありません。私も子どもたちも  
『もっと向きあって』と結婚以来何  
度も訴えてきたからです。必死に関  
わってきても夫はずっとポーカーフ

エイスの人でした。

経済的には保険もなんとかおくり、年金もありますので困りません。

ただ心配なことはこれから私ほどのように生きていけばいいのか、ということと自殺を知ってしまった子どもたちの今後です。『自殺した父親の子』という『置き土産』を子どもや私はどう背負っていけばいいのかに悩んでいます。これからの考えで前向きに生きたいのです」

いわゆる「遺族の悲しみ」に耳を傾けようと尋ねる私に妻は淡々と事実を語り前向きを強調する。つとめて冷静であろうとしているのかもしれないが、言葉のどこかに「あの人はあの人」という私事化の感じも受ける。聞けば子どもが父親の死に心を取り乱している様子もなく、「葬式より塾や友だちが気になっていく」のだ。気丈に振る舞う姿とは思えない家族への喪失感の無さ、希薄さとはなんなのか。相談を通して親である中高年層の人々の築いてきた家庭をふり返ってみると、そこには経済効率優先の価値観をひた走りするなかで手間を互いにつけあう家

族関係を軽視してきた日本社会に気づくのである。

関係性でみると家族、親子も、偶然であり、生身（リアル）の関わりにおいて、必然となる。その必然性を生む関係の営みが日常生活において東京オリンピック以降、急速に私たちの日暮らしから遠のいていったのである。高度経済成長からのグローバル化はこの約四十年間に人間関係のバーチャル化を生活の隅々まで浸透させていった。その時代の担い手が団塊の世代であり、偏差値世代といわれる中高年層の親たちである。団塊の世代は手間をかけ合う親子関係のなかで子ども時代を経験したが、子育て中は短時間で効率よく育つ子を「いい子」と思い、関わることは学校と塾と偏差値と専業主婦の妻たち・保育所にまかせた。後にその偏差値世代と呼ばれる子ども達は評価と成果主義の中に生かされ常に人と比較される子ども時代を過ごし、今、親となり「わが子の成績が自分の成績に思える」苦しみをかかえている。すでにこの世代になると母親も父親も似たライフスタイルとなつていく。そしてバブル崩壊

後、「努力しても報われない者」は成果無き「弱者」として効率社会から切り捨てられたのである。パージされたことに気づいた中高年層はあらためて効率や評価や比較でジャッジされることのない、そのまんまの自分を絶対肯定してくれる家族の人間関係に回帰しようとしたのである。しかしいくら「もつと向き合つて」と妻や子から言われても、私事化を「個性」と履き違えていた父親たちには家族とのコミュニケーション不全は「こころの危機」を突きつけられるものでしかなかったのである。この関係性の喪失から脱出し、共感性、自己肯定感を獲得し、生きる喜びとするには縁起と無常観を支えに家族やまわりの人に甘えるしかないのである。

しかし甘えられないのである。甘えるには「信じる」勇氣がいる、素直になれないのである。物事を合理的に分けて矛盾（葛藤）を排除していく思考を絶対としていくと不信を先取りし攻撃的になる。

分け隔てしないで、縁と無常の循環的人間関係を取り戻していくことが現代人の「こころの危機」を救う

道である。

甘えることができる人は絶対に自殺しない。なぜなら孤独から抜け出し人とつながるための傷つくりスクを私事化で逃避することなく背負うことができるからである。

夫に先立たれた妻や子が「これからを考えて前向きに生きていく」には、夫の自殺が四人に問いかけた「こころの危機」の課題と向き合っていくことである。

富田富士也(とみたふじや)氏

教育・心理カウンセラー/コミュニケーショントレーナー

現在は幼児期から高齢者までのカウンセラーとしての僧侶や地方議員の研修に取り組んでいる。

千葉明德短大客員教授、千葉大学教育学部講師を経て現在「子ども家庭教育フォーラム」代表。

著作『縁・愛・願』(北水)『お父さん、お母さん、こっちは向いて』(本願寺出版社)他多数

<http://www.kodomoforum.com/>

※次回の「論点・視点」(六月号)は、村上興匡氏にご寄稿いただきます。

# 加盟団体をゆく

## 《第十五回》融通念佛宗

今回は融通念佛宗総本山大念佛寺（大阪市）を訪ね、吉村暲英宗務総長及び岡田眞澄庶務部長にお話を伺いました。大念佛寺はJR

平野駅から徒歩五分という近さですが、日本最初の念仏道場と呼ばれており、元禄期に本山として体裁が整い現在に至る歴史ある寺院です。



吉村暲英宗務総長（右）及び  
岡田眞澄庶務部長（左）

―宗派の活動で、継続的に、また特に力を入れていらっしゃる点についてお聞かせ下さい。

融通念佛宗では、私が宗務総長に就任してからは「一にも布教、二にも布教」を掲げ、融通念佛という教えを、檀信徒はもちろんのこと、信徒以外の人々に対しても広めることを大きな目標として掲げております。

その為に、僧侶研修会を開催し、僧侶が教典の内容をしっかりとつかみ、自信をもって布教できる資質を持てるよう取り組んでおります。『法華経』を中心とした天台学、『華嚴経』を中心とした華嚴学、理論付けとなる論部、声明や作法等の法儀の研鑽など、学ぶべき事は多々あります。実践も教理も共に大事なものですので重きを置いて研修を行っております。

宗議会の方々の考えやその方針にしても、融通念佛宗の布教のために共通の目的を持ったもの同士が助けあうという「助縁」が第一であるはずですが、同じ目的に向かつて力を合わせ、原点に立ちかえる事が重要だと感じます。

また、最大の伝統行事として「万部おねり」を大念佛寺で五月初頭に行っております。二十五体の菩薩さまの絢爛豪華なおねりは圧巻で、非常に見応えがあります。より多くの方々に楽しんで頂けるよう広報活動に力を入れていきたいと思っております。



「万部おねり」の様子

―昨今の様々な社会問題について、感じていらっしゃる思いをお聞かせ下さい。

青少年の非行に関する問題、自殺に関する問題、高齢化社会への対応等は大変深刻であり、仏教界としても総力を挙げて取り組んでいくべき問題と感じております。

教育に関しては、宗教色を廃しすぎ、先生にすら宗教的情操が欠如しているのは大変問題です。政教分離は鉄則ですが、宗教情操までも切り離してしまったことが今日の混乱の大きな原因の一つではないでしょうか。教材を作成したり、中身を検討したりする際に、宗教界からの助力を仰ぐようにすべきだと思いますし、仏教界もそうした取り組みへの推進を行っていくべきと考えております。

自死問題に関しても、戦争よりも死者が多いという事態をもっと深刻に受けとめるべきと考えます。

また、特に最近深刻さを感じるのが老人ホームで生じる諸問題です。一部の老人ホームでは、入居した方々が愚痴や不平不満を頻繁に述べるようになってしまったり、暴力をふるうようになってしま

もうケースがあることです。家に居る時は、お仏壇に手を合わせてお念仏を熱心に唱える敬虔な仏教徒であった方でも豹変してしまうというケースも実際目にします。

施設によつては、宗教者を呼んでお話しを聞く所もあり、宗内でも依頼を受けて講師を派遣する事はございます。ですが、要請を受けてから行く、という事しかできませんので、もう少し積極的なアプローチができないものか、と憂慮しております。生きる喜びや、感謝の気持ちを施設に入居している方々にも体験して頂くことが仏教者の使命ではないかと考えております。

しかし、職業においても現代社会は分業化が非常に進んでいきます。そうした世相において、全ての僧侶がそこまで万能なのか、というのは議論の余地があると思います。私個人の意見としては、僧侶個人も得意分野によつてある程度の分業化が必要ではないか、と考えております。その分、ネットワークを広げていき、沢山の人間

が集まって相互に苦手分野を補い、こうした社会問題へ対応していくことが必要なのではないのでしょうか。

―現在の仏教界と今後の仏教界の在り方についての指針をお聞かせ下さい。

日本の仏教は宗派仏教であり、宗派の垣根を越えて連携の必要性は様々なところで繰り返し述べられており、重要なことと思えます。しかし、一般の方々の声を聞いても、宗派というものに結構こだわっているケースもよく目にします。

たとえば、引越して融通念佛宗が近くに無い場合、他の宗派で、浄土系のお寺をご案内する場合がございますが、どうしても宗派が違うのでおまいりして頂くにはいかなない、との声を檀家さんから頂く事が結構ございます。世俗の縁は、せいぜい三十年、五十年も続けば良い方で、お付き合いがあつても孫の代までお付き

合いする事はまれだと思います。

しかし、お寺との縁は何百年という単位で続きます。ご連絡が途絶えてからも、ご先祖の過去帳を何百年と祀っているという事も珍しくなく、檀家制度や宗派仏教といった、現在の制度の良い点もあるのではないかと思います。

現在の制度にまつわる、経済的な問題は今後加速していくと思います。過疎化の問題はもちろんのこと、転勤や異動により寺院が経済的打撃を受ける事も増えてきております。そうした身近な問題に關しては、宗派の垣根を越えた連携のシステムを構築していくべきではないかと考えております。

―昨年財団創立五十周年を迎えた本会の活動へのご意見・ご要望がございましたらお聞かせ下さい。

大阪府仏教会の大会に参加させて頂いた際、宗教界に対する税金問題等、時事問題への取り組みへの提言やシンポジウムがあり、大変参考になった記憶がございます。

す。

政治が変わると宗教への取り組みが変わるというのは非常に悲しい事です。しかし、現状はそのようになっております。そうした面への取り組みを、全日本仏教会にお願いしたいと思います。

比叡山宗教サミット二十周年にも関わらせて頂きましたが、全日本仏教会の助力も頂き、宗教の垣根を越えて「祈る」という原点に立ちかえることができました。世界平和の実現に必ず繋がる意義ある行事だったと思えます。

各宗派や各団体が、そうした意義有る催しを行っており、各々ホームページ等で広報も行ってありますが、まだまだ十分に認知されているとは言い難い現状がございます。宗派そのものや、催しの紹介や広報も、全日本仏教会に行つて頂きたいと期待しております。

(談)

融通念佛宗ホームページ

<http://www.dainenbutsuji.com/>

全日本仏教会 財団創立五十周年記念事業

## 第二十四回世界仏教徒会議日本大会開催について

### — 開催趣旨 —

#### 五十周年記念事業と第二十四回世界仏教徒会議について

財団法人全日本仏教会は、二〇〇七（平成十九）年、財団創立五十周年を迎えました。そして三つの記念事業として、同年八月に記念式典（東京）、同十一月に第四十回全日本仏教徒会議（神奈川）を開催し、本年二〇〇八年十一月十四日から十七日の日程で、東京・浅草で第二十四回世界仏教徒会議日本大会（主催・The World Fellowship of Buddhist WFB 世界仏教徒連盟 本部タイ・バンコク）を開催するために現在準備を進めております。

今回の大会は一九七八年に第十二回大会が東京を中心に開催されてから約三十年ぶりの日本開催となります。大会は第十五回世界仏教青年会議（主催 世界仏教青年

連盟・WFBY）、第7回世界仏教大会会議（主催 世界仏教大学・WBU）も合わせて開催されます。各大会へは海外から約三百名の代表・オブザーバーが参加します。

大会では、浅草ビューホテルでの世界各国の代表者会議、仏教と社会の関わりについての七つのシンポジウム、また浅草寺を会場に行われる世界平和法要（仮称）、海外及び日本の各地域からの参加者の交流を深める懇親会等を主な行事として開催されます。

#### 統一テーマ「地域の縁、アジアの縁」そして世界へ

本会は財団創立五十周年記念事業を推進するにあたり、その柱となる統一テーマを設定しました。

「地域の縁、アジアの縁」、そして世界へ。人と人とのコミュニケ

ーション。お互いを認め合い、理解し、支え合う関係のありようを、釈尊の考えである「縁（起）」に求め、今日的課題として表現したものです。

コミュニティの崩壊が叫ばれている中での、地域仏教会を中心とした「地域社会」との対話と協働。仏教発祥の地であり、日本もその一員である「アジア」の人々との、仏教と通じての交流を協調。そこから世界へ、次代へ。私たちの強い意志の発信です。

#### 仏教と社会の関わりのシンポジウムを開催

「縁（起）」とは全ての生きとし生けるものが相互に関係し、共に支えあうことで世の中が成立しているという仏教の基本的な教えです。この教えは長い歴史の中で、様々な国々・地域の人々の暮らしの中で大切に受け継ぎ育まれて来ました。そして現在、環境・平和といった社会問題の解決に、宗教を越えた普遍性を持つ点で注目されています。

十一月十五日に開催されるシンポジウムでは、「Buddhist contri-

butions to resolving social problems... 仏教者の社会問題解決への貢献」をテーマに、世界の各地で起きている社会問題（自殺・精神医療、子供・青少年、ジェンダー、終末期医療、平和構築、社会開発・NGO、環境）について、釈尊の「縁」即ち「つながり」「支えあい」の教えに基づき、世界の仏教者が各国々・地域の中で行っている実践的な取り組みを報告します。

そして、釈尊の説かれた「苦」：現代社会の直面する様々な社会的課題を認識、「集」：その原因を把握、「滅」：解決方法の検討、「道」：具体的な解決への努力という四諦（したい）の教えの道筋に従い、今後、我が国及び世界で、仏教が地域・社会との関わりの中で果たすべき役割と意義を確認し、まさに今、私たちが具体的にどのような一歩を踏み出すべきかを検討して参ります。

そしてその成果が今後の本会、日本の各地域のご寺院、WFBと関係諸国の仏教者の新たな活動の端緒となり、宗教の枠を越えて広く一般社会へと及ぶことを期待しております。

## 浅草…「ご縁」の生きる町、 世界平和法要(仮称)の奉修

今大会の会場となる浅草は、長い歴史の中でその門前に多くの商店が榮え、今も人々に温かい仏さまの「ご縁」の心が生きる町です。十一月十六日午後には、今年本堂再建五十周年を迎えた浅草寺で、多くの国々からの僧侶・仏教者が色とりどりの法衣等を纏い参列し、世界平和法要(仮称)を行います。地域に根ざした日本の仏教文化の素晴らしさを、内外からの参加者が肌で感じて頂ければと考えております。

## NEXT50、未来を担う人材の育成

今回の日本大会開催に向け、また将来を担う国際的な仏教者を育成するために、二〇〇七年四月より在京の仏教系大学の協力の下、仏教英語プログラム(Buddhist Education Program)を開催しています。授業は英会話の基本から、仏教語の英語表現について、また実際に外国からのゲストをお迎えする際の対応の仕方などを、

それぞれ専門家を招き研修を行っています。参加者は、本年の日本大会開催の準備及び当日の運営に携わり実体験の中で国際交流を学びます。

また昨年八月には、世界仏教青年連盟(WFBY)の主催で、姫路・奈良の寺院を中心とした会場で、日本を含めアジア八カ国の青年仏教徒参加の下、交流プログラムが開催されました。今回の大会では、再び彼らが日本に集い、会議・諸行事を通じて交流を深めます。

この度の日本大会開催に際しては、本会加盟団体、関連団体および地元の浅草寺様、浅草観光連盟様、また浅草地区商店街及び町内会の皆様の深いご理解・ご協力の下、現在鋭意準備を進めております。ご協力を深謝申し上げますと共に、関係各位におかれましてはこの趣旨に鑑み、大会開催に際しましての尚一層のご協働を何卒宜しくお願い申し上げます。

(財)全日本仏教会

## 第二十四回世界仏教徒会議 開催要項

(二〇〇八年四月十四日現在)

### 一・会議

第二十四回世界仏教徒会議

(主催)世界仏教徒連盟(WFBU)

第十五回世界仏教青年会議

(主催)世界仏教青年連盟(WFBY)

第七回世界仏教大会会議

(主催)世界仏教大学(WBU)

### 二・テーマ

五十周年記念事業統一テーマ

「地域の縁・アジアの縁」そして

世界へ

第二十四回世界仏教徒会議テーマ

「Buddhist contributions to resolving social problems... 仏教(者)

の社会問題解決への貢献」

の社会問題解決への貢献」

### 三・会場

浅草ビューホテル(会議)

浅草寺(法要)

### 四・日程 十一月十四～十七日

(十三日より準備会議等開催)

午後 開会式(Opening Ceremony)

世界仏教徒会議第一回全体会議

夜 歓迎懇親会

※WFBU・WBU・日本側会議併催

十五日(土)

午前 環境問題に関する映画上映

ゲストトーク(予定)

午後 シンポジウム(七部会)

一、自殺 二、子ども・青年

三、ジェンダー

四、終末期医療 五、平和

構築 六、仏教的な社会開発

七、環境

WFBU各種委員会(九部会)

加盟団体代表者会議(仮称)

夜 交流懇親会

※WFBU・WBU・日本側会議併催

十六日(日)

午前 世界仏教徒会議第二回全体

会議

午後 世界平和法要(仮称) 浅草

寺にて)

夜 記者会見・閉会式・夕食

※WFBU・WBU会議併催

十七日(月)

参加者離日

十四日(金)

午前 総会・執行役員選挙等

## 理事会・評議員会・参与会開催

本会の理事会・評議員会・参与

会が三月二十七日に、リーガロイヤルホテル京都にて開催された。

理事会・評議員会・参与会では、第二十八期の人事、平成二十年年度の事業・予算等が慎重審議された。

理事会議案として、

一、第二十八期会長及び副会長推戴の件

二、第二十八期評議員・参与選出の件

三、第二十八期理事長・常務理事の選任について（以上本誌二頁～五頁参照）

四、平成二十年事業計画（案）

について承認を求める件

五、平成二十年収支予算（案）

について承認を求める件

六、平成十九年度補正予算（案）

について承認を求める件

の議案が上程され、全会一致で承認された。

また同日開催の評議員会議案は、

一、第二十八期理事・監事選任の件（本誌五頁参照）

評議員会協議事項として、

一、平成二十年事業計画（案）について意見を求める件

二、平成二十年収支予算（案）について意見を求める件

三、平成十九年度補正予算（案）について意見を求める件

が審議され、全会一致で賛同を得た。

理事会・評議員会共通の協議事項として、

一、第二十七期審議会報告（答申）について（『全仏』誌五三八号八・九頁参照）

総務財政審議会答申に付属する「賛助会員規定（案）」について、全会一致で賛同を得た。

二、その他

その他の協議事項として、加納理事より「いじめと自殺」の対策

について、松濤理事より「世界仏教徒会議に向けてのコメント」と

して、それぞれ資料に基づき提言がなされ、全会一致で賛同を得た。

報告事項として、以下の事項が報告された。報告事項一・二に關しては、関係諸官庁から報告された。

一、朝鮮半島出身旧民間徴用者等の遺骨返還について（厚生労働省・外務省より報告）

資料に基づき実態調査・実地調査の現況が報告され、適切な方法で返還されるよう努力していく旨報告された。

二、最近の宗務行政について（文化庁宗務課より報告）

公益法人制度改革の概要・宗教法人法の一部改正・宗教法人の適切な管理運営等に関する報告された。

三、公益法人制度改革について

長谷川正浩顧問弁護士より、公益法人制度改革における収益事業課税方式の項が紹介された。

四、財団創立五十周年事業について

世界仏教徒会議日本大会、五十周年記念誌についての現況報告が

なされ、より一層の協力を頂きたい旨要請された。また、記念事業収支・勸募部会の現況について報告された。

五、宗教教育推進委員会設置について

資料に基づき、宗教教育推進委員会の設置（平成二十年四月一日から）と規程について報告された。

六、第二十八期各種審議会・委員会及び事務総局員・関係団体派遣役員について

資料に基づき報告された。

七、各都報告

広報文化部

ホームページ及び『全仏』誌を通じた広報の充実を目指していく

上で、より一層の加盟団体の協力を頂きたい旨要請がなされた。

社会人権部  
チベット及びミャンマー情勢についての理事長声明の発表と取り組みについて報告され、今後各方面への取り組みを継続する旨説明された。（本誌十六頁、及び折り込みハガキ、全仏ホームページ参照）

## 答申についての 審議会委員長コメント

第二十七期理事長諮問に対しての各審議会の答申について、審議会委員長よりコメントを頂きましたので掲載致します。(各答申は『全仏』誌五三八号に掲載)

### 社会人権審議会委員長

田澤元泰

本審議会は、平成十八年七月二十八日に安原理事長より、  
諮問一 日本国憲法改正論議における本会の対応について、  
諮問二 靖国神社への首相及び閣僚の公式参拝中止の要請について、  
諮問三 同和・人権問題への対応について、の三つの諮問を受けました。当審議会では部会を二に分け、社会部会では諮問一と諮問二を、人権部会では諮問二と諮問三を、それぞれ専門性を活かして

つ、全体会議は四回、社会部会と人権部会はそれぞれ五回の審議を進め、平成十九年十二月十八日、理事長に答申書を提出した。

審議の内容は

諮問一については「不殺生戒」

「信教の自由」「政教分離」に関する憲法第九条・二十条・八十九条を中心を検討し、仏教者としての視点から世界平和を願う意義を深め、加盟団体を含め広く社会の理解を得るための議論を継続する必要性が確認され、あえて三項目を別記提示した。

諮問二については従来行われてきた「中止要請文」の提出だけでは不十分だとの判断のもとに、平成十九年八月七日に安部首相に提出した要請文には、今後参拝が行われた場合には「抗議の意を表す」との表示を付け加えるとともに、抗議文を作成した。

諮問三については部落解放問題に取り組んでいる関係者との関連もふまえて広く人権問題をとらえ、加盟団体相互の情報や意見交換を進めていくことを確認した。

なお『全仏同和委員会二十六年の歩み』(下記参照)を取り組みの記録として答申に添付した。

### 国際交流審議会委員長

松濤弘道

今日、わが国はご承知の通り、あらゆる階層で内憂外患の誠に厳しい状況に直面しており、仏教界においても他事ではありません。その精神的指導役を果たすべき仏教者に、もしこの危機的状況を打破する理念や自信や勇気もなく、お互いが傍観視して問題を先送りするならば、おしなべてじり貧どころかドカ貧に陥ること必至です。

そこで、来る十一月中旬に三十年振りで東京で開催される「世界仏教徒会議」を好機ととらえ、各自が日本仏教の存在価値を再認識し、一丸となって積極的にその実績を内外に発信する必要を痛感致します。小生はその具体的方策の一環として、『全仏』誌(五三六

号)紙上に、「時代を先取りする日本仏教へ」と題した提言をさせて頂きました。その実現のためには、早急に日本仏教界を代表する全日仏の財政的基盤の拡大・確立と、やる気と実行力のある人材の配置が不可欠であると考えます。

### 『全仏同和委員会二十六年の歩み』

社会人権審議会副委員長の司会のもと、同和委員会元委員長三師にご参集頂き、同和委員会が発足した時の状況と、二十六年間の経緯等を座談会方式でお話いただきました。その内容をまとめ、本会で冊子として発行致しました。残部僅少ですがご希望の方は本会事務局までお問い合わせ下さい。



## 懇親会開催

評議員会・理事会・参与会終了後、午後五時三十分より同ホテル内にて懇親会が開催された。

最初に仏教徒の歌「ああ、このよろこび」を斉唱し、大道晃仙前会長が挨拶され、続いて松長有慶会長は「WFB大会を機会とし世界の仏教徒と連携をすすめ、日本仏教の持つ底力を全世界に発信する絶好の機会」という主旨の挨拶をされた。新旧副会長が紹介された。安原晃前理事長の挨拶の後、豊原大成理事長は「大変な時代、私ども仏教徒は力を合わせて本当の意味での心の平和に尽力すべき」という主旨の挨拶をされた。

その後、杉山一太郎日本宗教連盟理事長が祝辞を述べられた。

中村文峰副会長の発声で乾杯を行い、組坂繁之部落解放同盟中央執行委員長が祝辞へと続いた。

懇親会の最中には、スクリーンに財団創立五十周年記念式典、第

四十回全日本仏教徒会議神奈川大会の様も上映され、参会の方々の視線を集めていた。

関係諸団体や国会議員等、約二百五十名が出席した。国会期間中にも係わらず仏教懇話会を代表して、前田武志氏（民主党参議院議員）が祝辞を述べられた。終始和やかな懇談が続き、臨済宗東福寺派の青木謙整宗務総長の発声で全員起立「萬歳」三唱の後、お開きとなった。



挨拶する松長有慶会長（写真中央）

## 「平和のために提言する世界宗教者会議」 「G8北海道洞爺湖サミットに向けて」協力に関して

世界宗教者平和会議（WCR P）日本委員会は、平成二十年七月、北海道洞爺湖で開催されるG8主要国首脳会議に併せて、WCR P国際委員会との共催のもと、「平和のために提言する世界宗教者会議」G8北海道洞爺湖サミットに向けて」を開催致します。

北海道洞爺湖サミットでは、気候変動に関する諸問題、とりわけ京都議定書の枠組みについての議論が焦点となり、二〇一〇年までに世界全体の温室効果ガス排出を半減させることなどを目標としています。日本政府内でも事前の話しあいが進められており、地球規模の緊急課題が主要なテーマとなると思われます。

今回のサミットでは、環境問題を中心に、紛争問題・テロ対策・貧困・核不拡散等の諸課題に対して宗教者としての役割を再確認し、具体的な行動計画の立案が期待されています。

本会が加盟する日本宗教連盟は、この催しに対して協賛を決定している。平和のために提言する今会議では、全体会議、分科会等を通じてG8関連の討議を行い、提言書をG8サミット議長国である日本国総理大臣を通じてG8各国首脳に提出することを予定している。

「平和のために提言する世界宗教者会議」G8北海道洞爺湖サミットに向けて」

主催 世界宗教者平和会議日本委員会

共催 世界宗教者平和会議国際委員会

協賛 財団法人日本宗教連盟

後援 世界連邦日本宗教委員会

日程 二〇〇八年七月一日～四日

（本会議 七月二日・三日）

場所 札幌コンベンションセンター

# 事務総局録事

三月(十一～三十一日)

十二日▼仏教英語プログラム

▼立正佼成会教団創立七十

周年記念祝賀会出席

十三日▼関西支局・近畿府県仏教

会合同会議出席

▼国際仏教興隆協合理事会

・幹事会出席

十四日▼局内会議

十八日▼浅草寺幼稚園訪問

十九日▼事務連絡会議

二十四日▼総務・WFB合同部会

二十五日▼中外日報社百十周年記

念出席(於 京都グラ

ンヴィア)

二十六日▼仏教英語プログラム

二十七日▼局内会議

▼理事会・評議員会・参

与会・懇親会(於 京

都) | ガロイヤルホテル京

都)

四月(一～十日)

二日▼辞令伝達・局内会議

三日▼BNN企画委員会出席

四日▼川崎大師晋山祝賀会出席

五日▼永平寺本葬儀参列

▼永平寺晋山式参列

九日▼局内会議

▼自民党役員と教育・文化・

スポーツ、社会教育・宗教

関係団体との懇談会

十日▼WFBシンポジウムコーデ

ィネーター打合せ

▼第二十八回同宗連総会出席

(於 知恩院)

## 訂正

前号(五三八号)表紙の目次において誤りがございました。

誤 天台眞盛宗西村岡紹管長晋山式正しくは、当該記事は一月号(五三六号)に既に掲載されており、五三八号には掲載されておりません。

謹んで訂正させて頂きまことに、不手際により大変ご迷惑をおかけしましたこと、関係各位に心よりお詫び申し上げます。

## 「救援基金」ご協力のお願い

本会では、国内外における災害救援や人道的支援に対し、緊急且つ迅速な対応をすべく「救援基金」を常時開設しております。つきましては、加盟団体・各御寺院・仏教徒の皆様、更に、宗派・宗教を超えて、皆様の暖かい浄財を下記口座までお寄せ頂きますようお願いいたします。

### 記

郵便振替口座 口座番号

00110-9-704834

口座名義 全日本仏教会救援基金

お問い合わせ先

財団法人 全日本仏教会

電話 03-3437-9275

### 【寄付者】

北条仏教会

神奈川県仏教会

(一月二十四日～三月十三日)

(順不同・敬称略)

ご支援ご協力ありがとうございます。

## 財団創立五十周年記念事業

### 特別協賛金寄付者

中尊寺

ご支援ありがとうございます。(敬称略)

## 祈りの世界②ミャンマー

ミャンマーの十一月から十二月は、子供たちの出家式の季節である。仏教徒の男の子は十才前後になると必ず剃髪して出家することが習慣づけられている。少年たちはきらびやかな衣装を身につけ、馬に乗ってお披露目の行列をつくり寺院へ向かう。これは王子ゴータマ・シッダルタが、愛馬カンタカに乗り城を出て出家するシーンを做ったものである。得度した少年たちは、お寺の規律に従って十日から一ヶ月ほどお寺で暮らし修行を続ける。



バガン国立博物館の仏座像

## 無料法律相談室

長谷川正浩顧問弁護士による、無料法律相談を毎月第二、第四木曜日の午後開催しております。本会事務総局03(3437)9275へ事前予約の上おいで下さい。

## チベット情勢についての声明

日本の伝統仏教界唯一の連合体である財団法人全日本仏教会および世界仏教徒連盟日本センターを代表し、現今のチベット情勢について、以下の通り表明いたします。

全日本仏教会は世界仏教徒連盟の唯一の日本センターとして、世界仏教徒連盟に加盟する各センターとは、その所属する国家・地域の政治形態の如何に関わりなく、同じ仏・法・僧の帰依三宝の立場から対等な関係を築いてきました。その立場は今後も変わることはありません。

ラサ市はチベット仏教の聖地です。今回、そのラサ市をはじめ中国各地において僧侶・市民と治安部隊の衝突により多くの死傷者が出ている深刻な事態に対し、私たち日本の仏教徒は深く憂慮しています。関係者に対しては、暴力に訴えることなく、対話による問題解決の可能性を模索するよう強く求めます。

なお、私たち日本の仏教徒は今後ともチベット情勢の推移を注視してまいります。

合 掌

二〇〇八年三月十七日  
財団法人全日本仏教会  
理事長 安原 晃

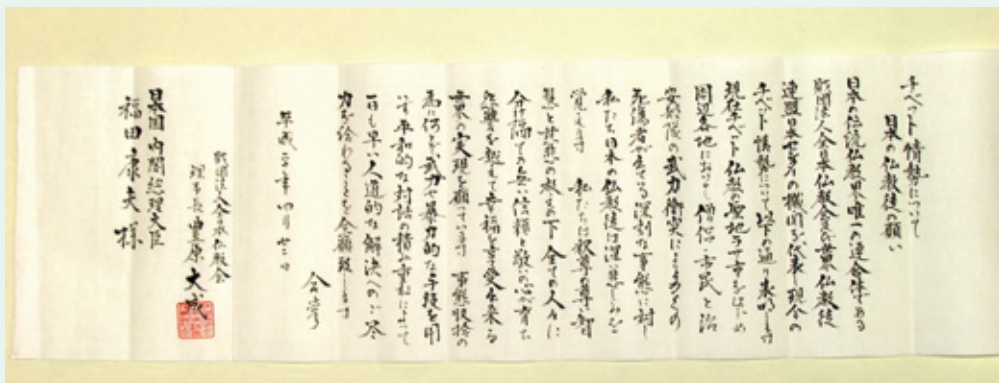
## 日本仏教徒の願いを直接届けましょう

中国胡錦濤国家主席、ダライ・ラマ十四世、福田康夫内閣総理大臣、潘基文国連事務総長宛のハガキを同封しました。日本の仏教徒の願いを届けたく思います。日本の仏教徒が注目をしているというメッセージを送ることにもなります。切手を貼り投函して下さい。ご協力をお願い致します。

※ ハガキのみをより多くの枚数ご希望の方は、事務総局までお問い合わせ下さいませ。  
(お申し込みは、十枚以上より受付致します。また、残部僅少につき配布終了の際は下記ホームページより印刷をお願いいたします)

※ ハガキは、全日本仏教会ホームページから印刷が可能です。是非ご利用下さい。

<http://www.jbf.ne.jp>



四月二十二日、首相官邸を訪れ、岩城光英内閣官房副長官を通じ福田首相に手交